

嵐が丘からマザリング・ハイツへ

罪の始まりはひとりの女の所為である。その女
のためにわれわれはすべて滅ぶ。

「集会書」25：24

林 完 枝

序

『嵐が丘』は『アグネス・グレイ』と共に1847年に出版された。作者はそれぞれエリス、アクトン・ベルであり、言うまでもなく、それらはエミリー、アン・ブロンテのイニシャルをもとにした男性名である（事情は、同年に出版された『ジェイン・エア』の「編者」カラー・ベルについても同様である）。1848年12月、エミリーが死に、翌年5月、アンも他界する。1850年、カラー・ベルつまりシャーロット・ブロンテは二人の妹の生涯について略伝をもっているが、とりわけ妹エミリーの最期は、これを読む者の心をもゆさぶるであろう。

くる日もくる日も、彼女がいかに毅然として病苦に対してかを見たとき、私は悲痛きわまりない驚異と愛をもって彼女を眺めずにはいらなかった。私はあのようなものを見たことはない。しかし、私は勿論、どこにも彼女のようなものを見たことはないのだ。男よりも強く、子供よりも単純に、彼女の性格はひとり立つ。おそろしいことに、他人に対しては同情心にみちながら、彼女は自分に対してはいささかの憐れみも持たなかった。魂は肉に対して容赦しなかった。⁽¹⁾

あい次いで弟と妹二人をなくした後、1854年6月、シャーロットは結婚し、妊娠するも、翌年3月他界する。妻と6人の子供に先立たれ、ただ一人ブロンテ家の中で生き残った父パトリック・ブロンテ師の依頼に応じて書かれたエリザベス・ギヤスケルによる伝記『シャーロット・ブロンテの生涯』は、1857年に出版された。

＊ ＊ ＊

イヴァ・フィッツは、ジェイン・オースティンとはちがってエミリーは女性に課された束縛をもともしなかった、と言っている。また、シャーロットと比較してエミリーは女に生まれたことを恨みがましく思いはしなかった、と言っている。⁽²⁾彼女らの作品を読めば納得のいく説明ではある。『嵐が丘』はいかにしてふさわしい結婚相手を見つけるかを物語ってはいない。この小説が広い読者層を獲得しているのも、キャサリンとヒースクリフのおよそ世俗のならざる恋愛悲劇の烈しさによるところ大である。とりわけ、ヒースクリフのキャサリンに対する身も世もあられぬ情熱と、二つの家に対する殆ど強迫観念と化した復讐である。行儀のよい話とは縁遠い。バタイユは、エミリーを「道徳的に純潔な生涯を送りながら、しかも悪の深淵についての深い経験を味わった」⁽³⁾と評している。

エミリー・ブロンテが「近代文学のスフィンクス」であるように、ヒースクリフは、英国小説の生み出した人物の中でも稀有なる呪詛と熱狂の対象であるように思われる。彼がそのまま『嵐が丘』のあらゆる力強さやおぞましさを体現している。1850年版『嵐が丘』の序文で、シャーロットはヒースクリフのような人物を創造したことに関して妹のために弁解し、「無限の闇黒の恐怖」がおおう『嵐が丘』にあってもそれでもネリー・ディーン、エドガー・リントン、老ジョゼフ、二人のキャサリンなどの人物造型に一つの救いを見出している。多分、創作家としてのエミリーについてではなく、慎しくまた志操堅固でもあった妹について読者に理解を求めているのだ。

さて、拙論は、小説史上特権的な創造となったヒースクリフ造型に匹敵する二人のキャサリンのあり方を、周到に計算され書き込まれた年代記を手がかりに考察するものである。小説全体をおおうヒースクリフの存在の陰に隠れてしまったものを読みとる作業を通じて、この

小説に単なる「愛と死」の主題の変奏曲ばかりを聞きとることは控えよう（なにしろ、第16章でキャサリンは同名の娘を産んで2時間後には死んでしまうのだから）。そして、小説の後半部分を再考してみよう。

I 年代記

嵐が丘の歴史は1500年に始まる。初代家長の名は、1801年ここを訪れたロックウッドが屋敷大扉の上に確認したように、ヘアトン・アーンショーである（第1章）。そして、1803年元旦を以て嵐が丘の歴史は閉じることになる。

『嵐が丘』の構成を拙いととるか見事ととるかは別として、この小説ではアーンショー、リントン両家の家系、登場人物の婚姻関係等がまことにシンメトリカルで整然としていることは、少し注意を払って読めば誰にでも明らかだろう。とりわけ驚きを禁じえないのは、C・P・サンガーが1926年に発表した論文『『嵐が丘』の構造』⁽⁴⁾で辿られているように、小説内の主要な出来事の全てが年代・日付をもっているということだ。サンガーの日付算出方法に関しては当該論文を参照していただきたい。疑いもなく、「1801年——いま私は、家主を訪問して帰ってきたばかりのところだ」で始まる『嵐が丘』は日付に取り憑かれている。エミリー・ブロンテは作品執筆にあたって綿密周到な年代記（一種の創世記か）を作成していたのだ。本章の主題は年代考証ではなく、サンガーによる考証によって明らかになった嵐が丘の「最近の」歴史を簡単に叙述し、そこにあるパタンを観察することである。『嵐が丘』の物語は言うまでもなく第1章、つまり1801年に始まるが、すべてはヒースクリフが老アーンショーによって拾われリヴァプールから嵐が丘に連れて来られた時に始まる。彼のせいで争いの嵐がわき起る。愛と復讐の劇の幕が切って落とされる。老アーンショーは家族にヒースクリフを紹介するに際して、「これもやっぱり神さまのたまものとしてお受けしなければなるまい。こいつは、ほんとに悪魔のところから来たと思うほどまっ黒だけれど」と言っている（第4章）。

ここで、先ずサンガー論文に依拠して、本章を進めるに必要な出来事の日付を抽出して示すことにしよう。

- 1771年、ヒースクリフが嵐が丘に連れて来られる。
- 1773年、アーンショー夫人の死。
- 1777年、アーンショー氏の死。ヒンドリー（息子）は

妻フランセスを伴って嵐が丘に戻る。

- 1778年、ヘアトン・アーンショー（ヒンドリーとフランセスの息子）の誕生、母フランセスの死。
- 1780年、エドガー・リントン、キャサリン・アーンショー（15歳）に求婚。ヒースクリフ逐電。リントン夫妻の死。
- 1783年、エドガーはキャサリンと結婚、キャサリンはスラッシュクロス・グレンジに住むことになる。ヒースクリフは嵐が丘に戻る。
- 1784年、両親の死及び兄の結婚によってスラッシュクロス・グレンジでの自分の場所を失ったイザベラはヒースクリフと駆け落ちし、嵐が丘に住むことになる。キャサリン・リントン（娘）誕生、キャサリン（母）の死。イザベラはヒースクリフとの生活に耐えかねて嵐が丘から逃げる。リントン・ヒースクリフ（ヒースクリフとイザベラの息子）誕生。ヒンドリー・アーンショーの死。彼の全財産は抵当に入っており、債権者ヒースクリフのものとなる。
- 1797年、イザベラ・ヒースクリフ（旧姓リントン）の死。エドガーはリントン・ヒースクリフをスラッシュクロス・グレンジに連れてくるが、結局、実父ヒースクリフによって嵐が丘に連れていかれる。
- 1801年、キャサリン・リントンはリントン・ヒースクリフと結婚。エドガー・リントンの死。リントン・ヒースクリフの死。（ロックウッドの嵐が丘訪問。家政婦ネリー・ディーンから嵐が丘の物語を聞く。）
- 1802年、ヒースクリフの死。（ロックウッドはスラッシュクロス・グレンジと嵐が丘を訪問し、ネリー・ディーンから後日譚を聞く。）
- 1803年、キャサリンとヘアトンは結婚する。キャサリンは20年ぶりにキャサリン・アーンショーの名を回復する。

登場人物の命名法にある仕掛けが隠されていることは容易に見て取れようが、とりあえず問題にしたいのは、この年代記にあらわれる死—結婚—出産—誕生—死のパタンである。

①親の死は子の結婚を導く。老アーンショーの死により、ヒンドリーは妻を伴って帰宅する。彼が嵐が丘の家長におさまることで、妹キャサリンは生家の外へ出ざるをえなくなる。両親亡き後嵐が丘にとどまっては単なる居候にすぎない。子供時代の王国は早晚滅びるほかはない。彼女はエドガー・リントンの求婚に応ずる。結婚という合法的手段によって嵐が丘を離れる。一方、ヒースクリ

フは養父の死後帰って来たヒンドリーによって下男的身分に落とされる。キャサリンの婚約によって、彼は完全に嵐が丘におのが場所を失い出奔する。リントン夫妻は、キャサリンがスラッシュクロス・グレンジにもたらした熱病に罹って死ぬ。エドガーの妹イザベラも、両親の死と兄の結婚によってキャサリンと似た状況になる。彼女はヒースクリフの誘いに乗って駆け落ちする。

次の世代の物語は1797年、13歳のキャサリン・リントンが初めてヘアトンに出会うことから始まる。イザベラ・ヒースクリフの死によって、リントン・ヒースクリフは嵐が丘に戻される。ヒースクリフの奸計にかかって、キャサリン・リントンはリントン・ヒースクリフと結婚する。エドガー・リントン、リントン・ヒースクリフ、ヒースクリフの3人があい次いで死に、生き残った2人、キャサリン（妹の娘）とヘアトン（兄の息子）が結婚する。ヒースクリフは、ヘアトンにとっては代父の如きものであり（ヒンドリー専制下のかつてのヒースクリフのように無知・無学に閉じこめられながらヒースクリフを慕って、彼の悪口をキャサリンに許さない）、キャサリンにとっては義父である。単純化すれば、父が死ぬと息子も娘も結婚する。

②誕生は死を招く。『嵐が丘』において、結婚した女性の子供一人を世に送り出しては皆早死にする。フランセスはヘアトンを産んで間もなく死に、錯乱のうちに娘キャサリンを月足らずで産んだ母キャサリンも同夜息をひきとる。ヘアトンは母を知らず父にうとまれ、キャサリンは母を知らず父の慈愛をうける。一方、ヒースクリフとの結婚生活にすぐ幻滅し絶望したイザベラは身籠ったまま嵐が丘を出て、リントンを産み育てるが、リントンが13歳のときに死ぬ。リントンは母に甘やかされ、父にはうとまれ利用される。

子供が成人し結婚し子をもうける後までもふた親がそろって生き延びることがない。先行世代はすみやかに後続世代に道を譲り消える。生殖は死と隣り合せてある。祖父母・両親・子という世代の共存がない。したがって、子の結婚に反対する親というものはない。二つの家系があるのみだから、配偶者の選択の余地はない、ただ組み合わせだけがある。その選択に臨んでの狐疑逡巡もなければ、プロット上の紆余曲折もない。二組の兄と妹があって、父の死後兄は家長におさまり、兄の結婚後、妹は生家を離れて自分を妻としてくれる男の許に嫁ぐ。三組の結婚によって、いとこ同士の子が3人生れる。母は父より先に死ぬ。3人の子供は女1人、男2人で構成されるので、婚姻の組み合わせは二種である。一組の結婚

（これはまさに子を投資金にみたてる父による政略結婚である）が成立する。間もなく夫が死に義父が死ぬので、もう一組の結婚が可能となる。以上が時間軸に沿った単純化である。ゲームの規則に支えられていることは確かである。

ここで18世紀後半の平均寿命、産褥期の死亡率、衛生学について、また、19世紀前半のブロンテ家の伝記上の事実やハワースの牧師館及びその周辺環境衛生については問わないことにする。⁽⁵⁾また、ブロンテが英国18世紀後半の財産・遺産に関する法知識を正確にもっていて小説に書きこんだこと、というか、プロット進行の面で見ればヒースクリフがおのが復讐にこれらの知識を悪用したことも、問わないことにする。死—結婚—誕生—死のパタンは、小説外の尤もらしさの持ち込み・補強ではなく、作者が企図した小説内の必然であるからだ。それゆえにこそ小説構築の人工性があらわになってしまっている。

前述のパタンは、『嵐が丘』の有名な語りの構造と相俟って、技法的にも主題論的にもこの小説を現にあるものならしめている。1771年、孤児ヒースクリフが嵐が丘にやってきてから、1801年、スラッシュクロス・グレンジの借家人ロックウッドが嵐が丘に両屋敷の持主ヒースクリフを訪ねるに至る30年のドラマは、当事者でもなく傍観者でもなくこれにかかわった家政婦ネリー・ディーン（彼女はヒンドリーとはほぼ同年齢である——第17章）によって、全くの部外者ロックウッドに物語られる。ヒースクリフの嵐が丘への登場を機に猖獗した死と暴力、愛と復讐のドラマは、実際にそれを見聞した田舎の常識ある女性によって、自称人間嫌いの都会人に物語られる。しかし、ともかく次のことを確認しておこう。人によってはたかがと呼べるかもしれぬ30年（これは通常一世代にあたる）の時間的推移に、2つの家（家系でもあり家敷でもある）の三代の歴史を見るがゆえに、というかそれ以外の全てが物語からしめ出されるがゆえに、『嵐が丘』の描き出す世界は、箱庭の充足性を備えることになる。時間的にも空間的にも限定された枠内にこそ、ゲームの規則は効果的に作動するのだ。

次いで強調したいのは、3組の結婚から生れる3人の子供たちがそれぞれ両家の遺伝的形質を受け継ぎ、類似した境遇におかれる事。ヒンドリーとフランセスの子ヘアトンは、ヒンドリーが老アーンショーに愛されなかったようにヒンドリーに愛されず、老アーンショーの死後ヒンドリーがヒースクリフにした仕打ち・待遇をヒンドリーの死後ヒースクリフから受けることになる。嵐が丘の子であるヘアトンに、ヒースクリフは自分自身を、さ

らにキャサリンを見出すのである。

「5分前、ヘアトンは人間でなくて、若い頃のおれが出ていたように見えた。おれはあいつに対して、ありとあらゆる感情をもったので、とてもあいつに理性的にものをいうなど、できぬ相談だった。

「まず、第一、あいつはびっくりするほどキャサリンに似ていて、気味が悪いほど、キャサリンと一つになってしまうのだ。だがな、おれの心を一番強く引っつかむだろうとおまえが思うようなことは、実は一番弱いのだ……

「それで、ヘアトンの姿というものは、おれの不滅の愛の、そしておれの権利をつかみとろうとするがむしゃらな努力の、おれの墮落の、おれの誇りの、おれの幸福の、おれの苦悶の、亡霊だったのだ……」

(第33章)

ヘアトンは遺伝と環境の両面から先行世代を反復する。キャサリンが同名の母キャサリンとエドガーから性格や外見を受け継ぐのは見易い道理である。母キャサリンの気性の激しさが父エドガーの人格の温和さに薄められた感はあるが、彼女はそれでもやはり、ロックウッドが考えたように(第14章)セカンド・キャサリンという役割を担わされている。ヒースクリフとイザベラの子リントンは、両親からそのマイナス面を受け継いだ。子供特有の残酷さ、利己主義、脆弱さといったものを。デヴィッド・セシルは、エミリー・ブロンテ以前に遺伝的形質をこのように扱った小説家はいないと言っているが、⁽⁶⁾だからといってほめたことになるかどうかは分らない。エミリーはメンデルやダーウィンを知らなかったろうし、壮大なルーゴン=マッカール叢書を書こうと意図したわけでもあるまい。先行世代の遺伝的形質がバイヤスを伴って次の世代に伝えられ、類似した境遇が反復されるのは、作者が仕掛けた命名法の策略(これもまた反復と組み合わせを特色とする)と同様に、この小説が一個の箱庭的小宇宙、一つの歴史であるという印象を与えるのに寄与する。悪循環だろうか。否、これはやはり一つの進歩なのだ。もし、一度起った嵐がおさまり、世界に再び静穏が戻り、それをしも進歩と名付けることができるのなら。もし、先行世代によって引き起された不和がつくろわれ償われ、収拾されることに進歩を見るならば。嵐が丘が亡霊の棲み家となり、若い二人キャサリンとヘアトンがより文化的なスラッシュクロス・グレンジに一緒に移り住むという小説の結末を、18世紀世界からの離脱と読むことだってできるのだから。⁽⁷⁾

ここでまた、世代の話に戻ろう。前述したようにこの小説では世代間の共存がおこらないように、主要な登場人物は早死にする。相対的に長生きしたといえるのは、エドガー・リントン(1762-1801)とヒースクリフ(1764?-1802)である。つまり、旧姓がアーンショーの方のキャサリン(1765-1784)の夫と、彼女と子供時代を共有し後には裏切られた恋人である。『嵐が丘』で描かれる家庭はいわゆる不幸な家庭である。それは身内の夭折によるばかりではない。老アーンショーは自分が外から連れてきたヒースクリフを可愛がり実の息子ヒンドリーを厭う。ヒンドリーはこの寡奪者を憎み、父の死後彼を虐待し墮落させる。彼をキャサリンから引き離し、教育の機会を奪い、下男のように酷使する。ヒースクリフはたった一人の味方と見えたキャサリンにも背かれる。彼女は地主階級のエドガー・リントンと結婚する。かくして、ヒースクリフはアーンショー、リントン両家への復讐を誓うのだ。エドガーの妹と駆け落ちするのも、ヒンドリーの全財産をまきあげるのも、妻の死後息子をひきとりキャサリン・リントンに結婚させリントン家の全財産をものにするのも、その名が示す通り嵐が丘の正当な持主ヘアトンからあらゆる教育の機会を奪いナイーブな状態にしておくのも、復讐の一環である(そして実質的には小説のプロットとなっている)。スラッシュクロス・グレンジで幸福な子供時代を過したキャサリン・リントンもまた、嵐が丘を訪れてから様々な苦難を嘗めることになる。ここには円満な家庭というものはない。孤児、片親しかいない子、寡夫がやけに目立つ。そのせいで、およそホーム・ドラマとも社会ドラマとも縁遠いドラマが展開することになったのだ。主要な登場人物の夭折ということと、彼らに人間の成長(これは19世紀小説の主題論的レベルでのクリシェの一つではあろうが)の跡が見られないということは、無縁ではない。人はエドガーやヒースクリフの性格や行動を、大人のようにとも子供のようだと形容しうるだろうが、そこには人物としての一貫性あるのみで、教養小説のパターンつまり「無知」から「経験」への成長を彼らの40年近い人生行路に見出すことは難しいのではないか。主要人物の多くは遺伝と環境が織り成す諸条件に縛られている。だが、逆境の中でそれにもひるまなかった若きキャサリンとヘアトンには、人間の成長の萌芽、変化のきざしが見える。すると、小説の後半で主要な部分を占める圧制者なる父ヒースクリフといとて同士の3人の子供たちの物語は、嵐が丘の歴史へのいかなる加筆となるのか。

II 「責めありや、責めなしや」

『嵐が丘』全篇を通じて読者を肯定的にであれ否定的にであれ捉えて離さないのは、ヒースクリフという人物であろう。実際、ネリー・ディーンの世界『嵐が丘』は彼の登場に始まり彼の死に終るのだから、それも当然といえば当然であろう。ヒースクリフはミルトン的かバイロンのか悪魔的ヒーローか、はたまたロマン派的想像力の産物か、19世紀前半の英国社会の典型的アウトサイダーか——いずれにせよ、ヒースクリフのインパクトが『嵐が丘』を今日までもポピュラリティある書物にしていることは確かである。たとえ、この作品の綿密周到に書き込まれた年代記、シンメトリカルな家系図、正確な地勢学、あるいは語りやの構造、作品の主題＝題材といったものが、研究論文の題目としてこれからも多くの研究家を捉えるにせよ。バタイユが、「この作品の主題とは、運命のさだめによって自分の王国から追われながらも、その失われた王国をなんとしてもふたたび見つけ出そうとする焼けつくような欲望にかられるままに、とどまることをしなかった呪われた者の反抗である」⁽⁸⁾ と言うとき、この「呪われた者」とはとりもなおさずヒースクリフを指している。そして、ヒースクリフの「反抗」とは、キャサリンへのアモラルな愛と二つの家への執念深い復讐である。また、ルイス・ブニュエルが、シュルレアリストたちを熱狂させたこの書物をやっこのことで映画化した際（1953）、『情熱の深淵』と名付けたのも、同じ事情によるだろう。

出版当時から、『嵐が丘』は作品としての力強さをその舞台となる荒野、それを具現したようなヒースクリフその人に負っている。ダンテ・ガブリエル・ロゼッティは、「悪魔の本、途徳もない怪物」と『嵐が丘』を呼んで熱狂した（1854）⁽⁹⁾。また、当時の書評はこの作品の荒ぶる力に圧倒されつつ反撥したが、このことは強度において熱狂と変わらない。最も早い時期にエミリー・ブロンテの詩才に気付き、文学を愛好する家族の中でもとりわけ彼女の才能を評価し、エミリーその人を愛したシャーロットは、それゆえ、1850年版『嵐が丘』の序文に、次のように書かずにはいらなかったのである。

彼女（エミリー）は、このような人物〔ヒースクリフ、アーンショー、キャサリンなど〕をつくりあげた後までも、自分がしたことがどんなものであったか、分らなかった。もし彼女の作品が、原稿で読まれた時に聞いたものが、あまりにも苛酷で執念深い性格、あまり

にも無残に墮ちた心情の、のしかかってくるような圧倒感のもとに戦慄したとしても、また鬼気せまる恐ろしい情景のいずれかを聞いただけで、夜は眠れなくなり昼は心の平静をかきみだされた、と苦情を訴えたとしても、エリス・ベルは、それが何のこたなの分らず、訴えた相手がつくり話をしているのではないかと思ったことだろう。

もし彼女が生き永らえたとしたら、彼女は精神的に成長してより立派な作品を書いたであろう、とシャーロットは続けている。1847年以降、エミリーは精神の均衡を失った、とするミュリエル・スパークの感慨とは対照的な仮定である。⁽¹⁰⁾

シャーロットは、ヒースクリフを回教で屍肉を喰う悪魔ゲールやアフリートに喩えているし、キャサリンへの愛を「凶暴で非人間的な感情」、「いずこかの悪鬼の邪霊のなかに燃え光る熱情」と評している。その口吻に曖昧さはない。彼女にとって、ヒースクリフはおぞましきハイライトであり、その出自からしても「存在論的他者」である。彼の嵐が丘への登場は、なくもがなの一つの余剰である。ヒースクリフこそは、『嵐が丘』全篇を通じてスポットライトを浴びている闇の力の表象である。では、この闇の力を陰でつき動かすものは何か、誰か——これは撞着だろうか。ヒースクリフは外見通り闇の力を秘め、その名の通り荒涼たる自然を表わし、嵐が丘にあっては不和の根源である。しかし復讐劇の主体なる彼とて、全き自由なる脚本家なのではない。彼はキャサリンからは決して自由になれない。本章は、ヒースクリフと表裏の関係にあるキャサリンにスポットをあてる。

『嵐が丘』の感動的な場面の一つに、ヒースクリフが窓の外へ向かってキャサリンを呼ばれる場面がある。1801年、ロックウッドが二度目に嵐が丘を訪れた際、吹雪のせいで彼は歓迎されぬまま、ここに泊まることになる。彼が案内された部屋は、かつて子供の頃キャサリンとヒースクリフが共に過した所であり、窓枠には、ひっかいた大小の文字が見える——キャサリン・アーンショー、キャサリン・ヒースクリフ、キャサリン・リントンと。彼はほぼ25年前のキャサリンの日記を見つけて読みすすむうち、眠りに落ちる。その夢の中で、ジェイベス・ウィリアム師の説教を聞き、ロックウッド自身が罪人として糾弾される。そして混乱。夢とも現とも判然とせぬまま、窓の外で音がする。何か木の枝と違って彼がつかんだ手は氷のように冷たい。その手は彼をつかんで離さず、すすり泣きながら「中に入れて」と言う。自分はキャサリン・リントンで「荒野で道に迷ったけど、帰ってきた

のよ」と言う。パニックにおちいったロックウッドの叫びを聞いてこの部屋にやってきたヒースクリフに、ロックウッドは事情を説明する。

私は、彼の言う通りに小部屋から出るには出たが、狭い廊下をどうゆけばいいのか分らず立ち停ったとき、思いもかけず、この主人のうわべの沈着さとはひどく裏腹な迷信じみたふるまいを見ることになったのである。

彼は寝台のところに寄って行って、格子をねじあげようと引っつかみながら、押さえきれぬ狂乱に涙をふりこぼした。

「おいで、おいで！」彼は泣いた。「キャシー、おいでよ。ああ、ほんとに——もう一度！ ああ！ おれの心の宝、キャサリン！ とうとう、今度は聞いておくれ！」(第3章)

読者ならずともここでキャサリンとは何者なのか、嵐が丘、スラッシュクロス・グレンジ両屋敷の現主人であるヒースクリフとどのような関係にあったのか、興味をそえられることであろう。こうしてロックウッドは、スラッシュクロス・グレンジの家政婦ネリーから嵐が丘の物語を聞くことになる。それは、リヴァプールから老アーンショーが「悪魔のところから来たと思うほどまっ黒」な孤児ヒースクリフを伴って帰宅した30年前に遡る。この物語の中で、何回か亡霊のモチーフが現れる。

キャサリンがエドガーと結婚し品のよい生活を送っているところへ、今や紳士然となったヒースクリフが3年ぶりにキャサリンをスラッシュクロス・グレンジを訪れる。再びキャサリンの精神の均衡は崩れる。彼女は窓を開け、錯乱状態のまま、見えもせぬ嵐が丘を見、そこで暮した子供時代に思いを馳せる。

「……あたしたちは幽霊なんか恐くないと言って、二人で行って、お互いに強がりっこして、墓場の中に踏みこんでいて幽霊出てこないで呼んだものだわ……でもヒースクリフ、これからあたしが強がりっこしようと言ったら、あんた出てくるかしら？ あんたが出れば、あたし一緒になる。あたし、あそこに一人で眠りたくはない。皆があたしを12フィートも深く埋めて、教会をその上に投げ倒しておいても、あたしはあんたが一緒になってくれるまでは、じっとしない……どうあっても！」

ひと息入れてから、不思議な微笑を見せながらまた始めました。「あの人は考えてるんだわ……あたしの

方から出て来て欲しいんだわ！ それじゃ、ゆくことにするわ！ でもあの墓場を通るのはいや……あんた、もじもじしているのね！ 不平なんか言わないのよ、いつもあたしについてきたじゃないの！」(第12章)

われわれは、ネリー同様にこれを熱にうかされた女の気狂いじみたたわ言とばかりにやり過ぎわけにはいかない。死に瀕したキャサリンはヒースクリフに言う。

「あたし、あんたを離したくない」彼女は激しく続けました。「二人とも死ぬまで！ あんたが苦しんできたことなんか知らない。あんたの今の苦しみなんか何とも思わない。苦しむのが当たり前なんだわ。あたしは苦しんでいる！ あんた、あたしを忘れるつもり——あたしが土の底に入ったらよろこぶの？ これから20年も経ってから言うの、『あれはキャサリン・アーンショーの墓だ。おれはずっと昔に愛していて、先立たれたときは辛かった。だがそれも過ぎたことだ。あれからたくさんの女を愛してきた……』そう言うの、ヒースクリフ？」(第15章)

キャサリンの訃報をネリーから聞くヒースクリフの叫びはこうだ。

「……おお、君はぼくの苦しみなんか何とも思わないと言った！ それで僕はただ一つの祈りをするのだ——この舌が干からびてしまうまで繰り返す——キャサリン・アーンショーよ、このぼくが生きている限り、君が安息することのないように！ 君はぼくが君を殺したと言ったが——それならば幽霊になって出ろ！ 殺された者は、殺した者を苦しめに出るはずだ。ぼくは信じる——ぼくは、幽霊が地上を迷い歩いたことがあったと思っている。いつもぼくのところに来てくれ——ぼくを狂わせてくれ！ ただぼくを、君を探せないまま、この深淵に放ったらかさないでくれ！ おお神さま、どう言ってもいいか分らない！ ぼくは自分の生命なしに生きることはできない！ 自分の魂なしに生きることはできない！」(第16章)

キャサリンとヒースクリフ二人の望むところは一致している。この熾烈な願望は結局、充足されるのである、肉体の死と引き換えに、キャサリンの死後18年後に。ヒースクリフが生涯賭けた復讐劇は、嵐が丘でヘアトンとキャサリンがこれまでの反目を捨て仲よくなった頃、頓挫する。キャサリンの死以来、ヒースクリフは彼女のこと

を片時も忘れなかった、というか、彼女が忘却を許さなかった。「世界全体が、かつて彼女が生存して、そしておれが彼女を失ったという恐ろしい覚え書の集合体なのだ！」また、「おれにはただ一つの願いしかなくて、おれの全身と全精神力とがそれを果そうと焦がれている。これほど傍目もふらず焦がれてきたのだからそこへ行く——しかも間もなく——とおれは確信するようになった。なぜならば、おれの全存在がもうそれに喰い尽され、おれはそれが達成するという予感の中に呑みこまれてしまったのだ……おお神よ、何という長い戦いだ、もう終ればいいのだ！」(いずれも第33章) 食事も睡眠も忘れてヒースクリフは死ぬ。ヒースクリフと女とが近隣をさまよい歩くといい噂が広まる。若いカップル、ヘアトンとキャサリンは嵐が丘を「そこに住みたい幽霊にあげ渡して」(ロックウッドの言)、二人してスラッシュクロス・グレンジに移り住む。この結末のみが、キャサリンとヒースクリフ二人の亡霊が嵐が丘に残り、キャサリンがヘアトンとの結婚でアーンショーの姓を回復して生家スラッシュクロス・グレンジに戻れることを可能ならしめるのだ。キャサリンは2人いる。

ヒースクリフはおのが知恵と力を尽して、アーンショー、リントン両家の人々に復讐する。彼らは犠牲者である。ただ一人、両家に深くかかわりながら、ヒースクリフの犠牲者たるを免れるものがある——即ち、彼の命、彼の魂であるキャサリン。彼女は先ず、荒野をさまよう子供の亡霊として現れ、次いで、ネリーの語る物語の中で、子供時代をヒースクリフと共に過し、スラッシュクロス・グレンジを知ったことでヒースクリフから離反する女性として現れる。彼女はエドガー・リントンの求婚を受け入れる。ヒースクリフの嵐が丘出奔は、ネリーに求婚のことを告げるキャサリンの台詞、「今となっては、ヒースクリフと結婚するなんてあたしの身をどん底におとすことだわ」(第9章)を盗み聞いていることだ。

これまでのところは、その恵まれぬ少年時代、老アーンショー死後のヒンドリーによる虐待などで、彼にはそれなりに同情される点があった。まさか、最後の砦キャサリンすら敵の手に落ちようとは！しかし、彼の復讐は二つの家に対してであって、自分を裏切った女に対してではない。この女のせいでの復讐劇が本格化したというのに、キャサリンは同名の娘を遣して死んでしまう。復讐の完遂を目前に控えて彼がこの企図を放棄し死ぬので、キャサリンは自分の死後、娘キャサリンを兄の息子ヘアトンに結びつけ両家を統合するように、ヒースクリフに仕向けた恰好になっている。まるでキャサリンが望んだことをヒースクリフが代行したかのように、しかも、

死における魂の合一という含蓄をもたせて——これでは還元主義的にすぎるだろうか。ヒースクリフとは、キャサリンが両家にふるう鞭なのか。この小説をヒースクリフの復讐劇としてよりむしろ(確かに表向きはそうなのだ)、ある懲罰の、したがってある成就のドラマとするならば、そのとき、ヒースクリフの陰に隠れて彼をつき動かすキャサリン、という像が立ち現れる。

そもそもことの起りは女の裏切りなのだ、肉においてではなく魂において——これはヒースクリフの観点である。ネリーはエドガーのキャサリンへの求婚を聞き、専制的な兄の支配する嵐が丘を遁れて、上品な家庭に入ることを意味するこの縁談に賛成する。独立自営農民の娘が地主階級の家に嫁入りする。これは社会的に成り上ることだから「良き結婚」である。ネリーが気にくわないのは、キャサリンがブルジョワ社会に参入しその価値観に迎合することではない。働くことを厭い、結婚によって妻という立場を選びとることで自己実現をはかることは、1873年の法律修正をみるまで、社会的には一種の準禁治産者であった女という性を考慮するなら、特に非難されるにあたらぬ。ネリーにとって不愉快なのは、エドガーと結婚しておきながら、しかもヒースクリフとの仲をエドガーは認めなければならぬとするキャサリンの、いい気な見通しである(第9章)。後に、そのことでエドガーは妻を責める(第11章)。キャサリンは、ヒースクリフもエドガーも共に必要なのだ。これは世俗の倫理に反する。子供っぽい、思慮に欠ける、独占欲が強い、要するに思春期特有のナルシズムだ。⁽¹⁾彼女は死なねばならぬ。その死は悦ばしき懲罰とすら言えるものだ。わが後には、わたし以上にわたしであるヒースクリフと、同じ名のキャサリンがいる。子供時代のヒースクリフにそれなりに同情するネリーさえ、この意志的に世間知らずなキャサリンには同情を示さない。これと対照的なのは、若い二人、キャサリンとヘアトンに対する彼女の態度、意見である。彼女は二人のいわば代母である。「ご存じと思いますが、わたしには二人とも、まあ言ってみれば、自分の子供のように思われるのでした」(第33章)。キャサリン・アーンショーがエドガーと結婚してスラッシュクロス・グレンジに移り住むまで、ネリーはフランセス亡き後父に疎まれるヘアトンの母親代りであった。また娘を産むや死ぬ母キャサリンの代りに、キャサリン・リントンがリントン・ヒースクリフとの結婚によって嵐が丘に移り住むまで、キャサリンの世話をした。単なる家政婦であるにとどまらない。例えば、キャサリンが内緒で嵐が丘にリントンを訪ねに行ったことを知って、ネリーはまるで娘に裏切られた母のような心境になる。この

小説では、種の再生産に縛られ子を産むや死ぬ女たちがおよそ母性というものと無縁であるときに、家政婦であるネリーはただ一人、母性神話を信じそれを体現している。キャサリンはネリーを「わが隠れたる敵」と呼んでいる(第12章)。

そして、若きキャサリンがいる。彼女の姓はリントンからヒースクリフへ、さらにアーンショーへと交換されてゆく。女にとって結婚とは先ず改姓、そして生家を離れることであろうが、彼女の結婚は、その母とのつながりにおいて一種異様なあり方を示す。リントン・ヒースクリフとの結婚によってキャサリン・リントンとなって嵐が丘に行き、ヘアトン・アーンショーとの結婚によってキャサリン・アーンショーとなって嵐が丘を出る。つまり、名において母に戻り、住む場所は生家スラッシュクロス・グレンジに戻るのだ。キャサリンの結婚から20年を経て。キャサリンのキャリアを「教養小説」として見るならば、それは単に例によつての「無垢」から「経験」への移行の物語⁽¹²⁾ではなく、母がなしえなかったことを娘が継承し成就した物語ともなろう。だからこそ、年代記は何としても綿密であらねばならぬ、この娘とこの母は類似し且つ対照的でなければならぬ。いや、母と娘とを弁別すべきではないのかもしれない。二人のキャサリンは二人あって始めて意味を持つかもしれない、恰度ヒースクリフがキャサリンあつての彼であるように。

若きキャサリンが嵐が丘の逆境の中で学ぶのは、わがままで病弱で父の単なる道具にすぎぬリントン・ヒースクリフをその死まで看取ること、さらに、教育の機会を奪われ社会的に隷属状態にあったヘアトンに文字を教え、彼を未開の側から文明の側へと橋渡しすることである。いずれも伝統的に母の役割とされているものだ。彼は嵐が丘の正面扉に自分の名が刻まれているのを知らう。

若い二人の結婚——それは1803年の元旦に行なわれることになっている——を誰よりも喜ぶのは、語り手であるネリーである。しかし彼女は、ヒースクリフらの幽霊がさまようなどという話は葉にもしたくない。彼が死ぬ直前そこに死相を見て恐怖にふるえるネリーは述懐する。「だけどあのちっぽけな黒ん坊はどこから来たのだろうか。善良なお方に引き取られてかえって禍を持ってきたあのものは」(第34章)。老アーンショーの評言を思い起そう。ヒースクリフは禍か、神の贈与なのか。外からの贈り物であることだけは確かである。リヴァプールからのおみやげに鞭を所望したのはキャサリンであったが、彼女は乗馬用の鞭はもらいそこねた。しかし代りに彼女はヒースクリフをおのが鞭とすることは出来たのだ。そして——ゲームが物語を口実が始まるのだ。

註

- (1) 『嵐が丘』からの引用はすべて阿部知二訳岩波文庫版に依る。シャーロット・ブロンテによる1850年版『嵐が丘』序文も阿部訳である。ただし、訳文は都合によりあらためた箇所もある。
- (2) Eva Figs, *Sex and Subterfuge* (Macmillan, 1982), p.139.
- (3) ジョルジュ・バタイユ『文学と悪』(山本功訳、紀伊国屋書店、1959)、4頁。
- (4) C.P. Sanger, 'The Structure of *Wuthering Heights*', in Thomas A. Vogler ed., *Twentieth Century Interpretations of Wuthering Heights* (Prentice-Hall, 1968). サンガーによれば、エミリー・ブロンテが『嵐が丘』において作品の背景に用いた18世紀後半の動産・不動産、地勢学、植物生態に関する叙述は正確であるという。
- (5) この点に関して、例えばデヴィッド・セシルは、ブロンテたちのヨークシャーはエリザベス朝の頃と変わらない、と言っている。
David Cecil, *Early Victorian Novelists* (Constable, 1934), p.149.
- (6) *Ibid*, p.177.
- (7) Terry Eagleton, *Myths of Power* (Macmillan, 1975), pp.113-114.
- (8) バタイユ、前掲書、11頁。
- (9) Miriam Allott ed., *The Brontës* (R.K.P., 1974), p.300.
- (10) Muriel Spark and Derek Stanford, *Emily Brontë* (Peter Owen, 1960), pp.87-88.
- (11) See Patricia Meyer Spacks, *The Female Imagination* (Avon Books, 1972), chap. 4.
- (12) Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic* (Yale Univ. Pr., 1979), p.254 ff.